

お菊と新吉

むかし、遊郭にお菊という女郎がいた。その遊郭の女衞せげんの下役に新吉という男がいた。ふたりは恋に落ち、逃げた。町を抜け、谷を行くと、草はらに出た。膝の丈ほどの一面の草。ほかには何も無い。不思議な草はらである。ふたりは走った。草を押し分け走った。日が沈む。ふたりは添い合って寝た。

日が昇る。ふたりは狂ったように逃げた。何日走っただろう。飢餓が襲ってきた。口に入れるものは草のほか何もない。お菊は疲れと飢えで息絶えた。

.....

新吉は、雲の上から、眼下の草はらを眺めている。草はらの中に黒い点が見える。何であろう。降りていくと自分がある。うつ伏して何かをしている。さらに降りていくと、新吉は泣きながらお菊を食らっていた。